

# 歴史資料としての写真

## 歩く、写す、そして保存する

渡辺健哉 わたなべ けんや / 大阪市立大学

スマートフォンの普及により、  
《写真を撮る》という行為は  
すっかり身近なものになった。  
こうして集めた写真は  
資料として扱っていくには、  
どのような点に注意すべきであろうか。

### 「なにを研究しているのですか？」

このように問われたら、私は、「中国史の、《元代における大都（現在の北京）の歴史》と《近代における日本と中国の学術交流史》を研究しています」と答えることにしている。ここでは後者について述べていきたい。

私が大学院生として過ごした東北大学（宮城県仙台市）の附属図書館には常盤大定<sup>じょうばん</sup>（1870-1945）によってもたらされた拓本（木や石に刻まれた文字や文様を紙に写しとったもの）が数多く収められている。大学院在籍時から、拓本の存在自体は認識していたものの、その中身、まして学術的価値に関心を寄せることはなかった。

ただし私にとって、常盤大定なる人物が気になる存在であったことは事実である。この点については別な文章に記したので、そちらを参照していただきたい（拙稿「モンゴル時代の石碑を探して——桑原隲蔵<sup>くわばらじつそう</sup>と常盤大定の調査記録から」櫻井智美ほか〔編〕『元朝の歴史——モンゴル帝国期の東ユーラシア』勉誠出版、2021年所収）。

ところが2009年になって、常盤の自坊である道仁寺が仙台市の市街地にあることを知り、加えて様々な偶然が重なり、道仁寺で資料を見せていただけることになった。そのなかには、古新聞にくるまれた約900枚におよぶガラス乾板（フィルム以前に利用されてきた感光材料の一種で、ガラス板に写真感光材を塗布したもの）が残されていたのである。現在それらは東北大学大学院文学研究科に移管されている。

### 常盤大定とその研究成果

常盤大定は、宮城県出身の僧侶で、東京帝国大学の文学部で教授をつとめた。日本における中国仏教研究の先駆者としての名声とともに、大正から昭和初期にかけて、辛亥革命後の余燼<sup>しんがいかくめい</sup>いまだ燻<sup>よじん</sup>る中国大陸に渡航し、現地調査を行ったことでも知られる。先に述べた拓本やガラス乾板は往時の成果であった。

のちに同大学の工学部教授であった関野貞<sup>せきの</sup>（1868-1935）とともに調査記録を整理し、以下のような書籍を出版した。

- ①関野貞・常盤大定『支那佛教史蹟 全5巻』（佛教史蹟研究会、1925-1928年）。
- ②常盤大定『支那佛教史蹟記念集』（同、1931年）。
- ③同『支那佛教史蹟踏査記』（龍吟社、1938年）。
- ④関野貞・常盤大定『支那文化史蹟 全12巻』（法蔵館、1939-1941年）、関野の死後に常盤が①と②をまとめたもの。
- ⑤同『中国文化史蹟 全12巻、増補1巻、解説2巻』（法蔵館、1975-1976年）、

④の増補改訂版。

③は詳細な旅行記で、それ以外は大判の写真——被写体は仏寺・道観（道教の宗教施設）の建築物、仏像、石碑等々——と解説文で構成されている。すべてが常盤や関野の手になる写真というわけではないが、写真のセレクトは二人の綿密な相談を経て行われていることから、学術的に重要なものが掲載されているとみてよい。

### ガラス乾板の修復

道仁寺に残されたガラス乾板のなかには、経年による銀汚染、カビの付着などで画像を確認できないものが複数あった。そこで写真修復の専門家である村林孝夫氏（株式会社リボテック大森研究室技師長）に依頼し、銀汚染、カビ、バクテリアに対して化学的除去を施していただいた。また複数のガラス乾板が圧着した例も確認されたため、その剥離もお願いした（村林氏の作業は、<http://rebotech.com/projects/tohoku-univ/>を参照）。結果として、400枚に及ぶガラス乾板に対して適切な化学的修復を施



写真1 『支那文化史蹟』所掲の普陀山の太子塔。左は明治40（1907）年3月、右は大正11（1922）年10月の撮影。



写真2 2010年12月に筆者が撮影した太子塔。



写真3 『支那文化史蹟』所掲の高山の大唐嵩陽觀紀聖徳感応頌碑。



写真4 2014年8月に筆者が撮影した大唐嵩陽觀紀聖徳感応頌碑。

すことができました。学術資源の保全という趣旨に賛同して、この作業に労力を費やしていただいた村林眞又夫、村林孝夫の両氏には、この場を借りて改めて御礼申し上げます。現在、ガラス乾板になにが写っているかの同定作業を進めている。

### 常盤大定を追いかけて

以上のような経緯を踏まえ、私は既存文献、当時の新聞記事や外務省に保管されている公文書等を用い、さらには常盤の妻の実家のあった山形県での現地調査も行い、常盤の調査の全体像の把握、ひいては常盤

の伝記的研究を進めつつある。

なかでも写真に関心を持って以来、中国でフィールドワークを行うにあたっては、常盤の調査記録を読み込み、可能な限りにおいて、常盤が訪問した場所を訪れるように心がけている。

写真5 『支那文化史蹟』所掲の洪武帝と后妃の陵墓にある武官の石像。

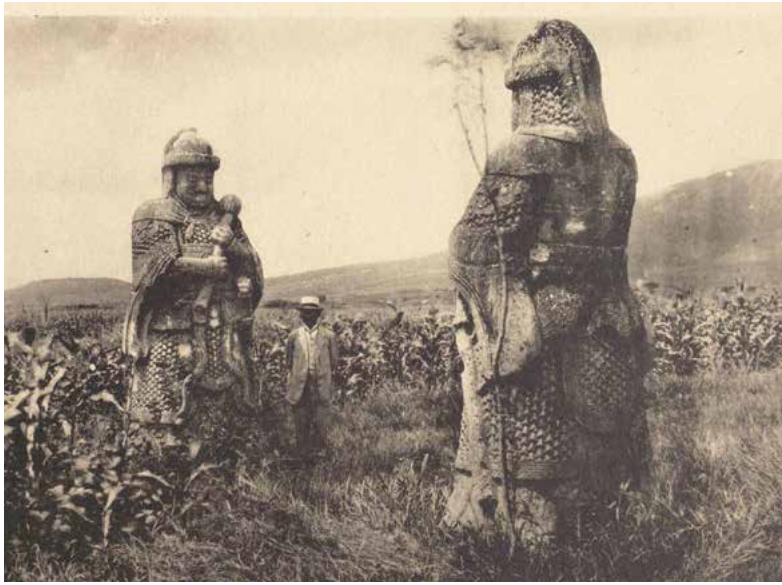


写真6 2011年2月に筆者が撮影した石像。

## 歴史資料としての写真

以下、ガラス乾板ではなく、前掲④所掲の写真と私が撮影した写真を対照しつつ、学術資料としての写真の可能性について述べていきたい。なお、引用した常盤の文章もすべて前掲④にもとづく。

**写真1、写真2**は、浙江省普陀山の太子塔(多宝塔)である。普陀山は浙江省寧波市の東方沖の島であり、観音信仰の聖地として古くから知られている。この塔は元代(1260-1368)の元統元(1333)年に建てられた。常盤は「破損してはあるが、猶古色を存し、島中唯一の古構」と述べる。左は明治40(1907)年3月に建築学者の伊東

忠太(1867-1954、山形県米沢市出身)が訪問した際に撮影した写真、右は大正11(1922)年10月に常盤が訪問した際に撮影した写真である。写真から理解されるように、常盤が訪問した大正時代にはすでに修復がなされていた。2010年の写真からも、常盤訪問後の修復の痕跡がうかがえる。

**写真3、写真4**は、河南省登封市嵩山の南麓に置かれる「大唐高陽觀紀聖徳感応頌碑」である。高さ約8メートルもある巨大な石碑で、唐代(618-906)の天寶3(744)年に建てられた。昔の写真からは、常盤の「今日猶威風四辺を払って屹立している」という表現を実感できるが、現状が

らそうした印象は得られない。石碑がどのように見えたのか、という視点から考察するにあたって、昔の写真が歴史資料になり得る好例である。

**写真5、写真6**は、江蘇省南京市の紫金山南麓に置かれた武官の石像である。これは明代(1368-1644)の初代皇帝である太祖洪武帝と后妃の陵墓(孝陵)に至る道(神道)に設置されている。写真5からは周囲の環境が現在とは全く異なっていることが分かる。なお、この写真は、大正7(1918)年の関野貞による調査時の写真で、向き合う武官の間に立っているのが、関野である。これは自らをスケール代わりに見立てて撮影したと思われる。

## いかに写真を未来へ伝えるか

本誌の読者には国内・国外を問わずフィールドワークに関心を持つ方も多いかと思う。その際、デジタルカメラやスマートフォンを使って写真を撮ることはいまや当たり前のことになった。ここまで見てきたように、そうして撮影された写真も後世には歴史資料と化すのである。

ここで悩ましいのは、写真の保存と共有の問題である。写真の原版となるガラス乾板やフィルム、デジタルデータを保存したメモリーカード、そして写真を焼き付けた印画紙等々は、いずれも経年による劣化や破損から逃れることはできない。温度・湿度が一定に管理された場所で保管できれば、一応の保全は可能だが、そうした環境の維持・整備は容易なことではない。

撮影した日時と場所を明記したデジタル写真ないしはデジタル化した写真を、たとえばクラウドのようなほぼ無制限に置くことができる空間に保管して、だれでもアクセスできるような仕組みを作ることにはできないであろうか。こうした空間を作ることができれば、保存と共有の問題が一挙に解決し、誰もが写真を資料として利用できるのではないかと、近頃夢想している。 